
ロンリーギルド

晴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロンリーギルド

【Nコード】

N3875W

【作者名】

晴

【あらすじ】

テルカリユミレースにやって来て早三年…元いた世界へ帰るために頑張る女の子のお話。

黄昏（前書き）

スローペースです…

黄昏

「もう三年……」

私は一人物思いに耽りながら真っ赤な夕暮れを眺めていた。

ドンに依頼されていた仕事を無事に完遂し、報告と休暇を兼ねてダングレストへと向かっている最中だ。

海へと吸い込まれるかのように地平線へと沈みゆく太陽。綺麗だなーと眺めていれば背後に邪魔をしようと蠢く影。

のんびりと夕焼けも見せてくれないのかと愚痴るが、右手はすでに腰に挿している刀にあり鯉口を切る。

滑らかな動作で刀を抜き放ち切っ先を魔物へと向け構える。

三年も経てば嫌でも身に付く一連の動作。

いや、生き残るための術の一つ。身を守るためにも戦わなくてはならない。

引いては帰るためにも立ち向かわなければならない。

「さあ、始めようか…」

なに一人でカッコつけているんだと内心ツツコミを入れつつ、刀を一振りした。

すたーと（前書き）

エクシリア、プレイ中…

すたーと

「うえー」

疲れた足を引き摺るようにヨロヨロとした足取りでダンゲレストの街へと架かる橋を渡った。擦れ違うギルドの人達が怪訝そうな顔で通り過ぎるから適当に誤魔化してギルド本部ユニオンへと急いだ。

「ドンいるー?」

入口から真っ直ぐ進んだ所にある一番奥の部屋の中にいる人物に向かって声を掛けた。すると部屋の中から厳つい声で返答があった。

「何だ?もう帰ってきやがったのか」

「うん、ただいま。まあお仕事は『迅速かつ確実に』がウチのモットーだからね。…それに今回も特に収穫もなかったし。パッパと片付けて終わらせてきた」

「ハハハ！魔狩りの剣の奴らでも手こずった魔物をたった一人で大したお嬢だよ」

「そんなことないよドン。それにちよつとでも早くして……」

（元の世界に帰る方法を見つけないから）

豪快に笑うドンの傍らで私はローブの袖口をギュツと握り唇を噛んで言いかけた言葉を飲み込んだ。

私がこの世界、テルカリユミレースに来て早三年が経とうとしていた。初めて此処に来た時、倒れていたところを通りすがりのギルドの人が私を拾ってくれた。目覚めた当時は自分の身に何が起こったか全く状況が分からなくて混乱した。電気なんてものはないから勿論携帯は繋がらず、外に出れば見たこともない魔導器が溢れ魔物までも存在する世界。

でもギルドの人達はどこからやって来たかも分からない見ず知らずの私を色々助けてくれた。お世話になったギルドの皆に恩返ししたい……。それがギルドの仕事を手伝い始めたキツカケでもある。

「まあ…そんな顔するな。焦らず行け、じゃねえと見つかるもんも余計見つからなくなる」

そんなに酷い顔をしていたのだろうか。ドンはまだで自分の孫を心配するかのような表情を浮かべると私の頭に大きな手を乗つけてクシャツと撫でてくれた。

「…ありがとう、ドン」

ドンに報告を終えてオリオン本部を後にして一旦宿屋に戻った。流石に何十の魔物を一人で相手をするのはクタクタになった。着替えるのもご飯を食べるのも億劫になったので部屋に入ったと同時にベツトにダイブ。そのまま深い眠りへと旅立った。

翌朝、盛大な腹の虫の音で目が覚めた。そういえば昨日の昼から何も口にしていなかったと納得しつついそいそと近所にある酒場へと向かう。ついでに次の依頼が見つかればいいなと淡い期待を抱く。

「らっしーい、おう久しぶりだなケイ！」

「おはよマスター、いつものでお願いします。大盛りで」

「そんな華奢な身体なのにどんな胃袋持ってたんだよ」

苦笑いしながら空いていたカウンターの席に座る。ボーとマスターの料理する姿を見つめていれば後ろのテーブル席に座る二人組の若いお兄さんの会話が聞こえてきた。

…で我が聴覚を疑った。

「見たかよ。コイツ帝都の城から脱獄したんだと」

「へえーでも下手くそな似顔絵だな…。っておい！！懸賞金80000ガルト！？」

ガタ！！と椅子から立ち上がった私に驚いた二人組の若いお兄さん達を無視して机の上においてある手配書を凝視した。

『ユーリ・ローウェル 懸賞金5000ガルト 以下の罪状に
て・・・』

…なんかもうストーリーー始まっているんですけど!!!

突入前（前書き）

お久しぶりです…

突入前

私の満腹中枢を満たしてくれる行きつけの酒場でくつろいでいると、1人の旅人が客に囲まれある噂について熱く語っていた。

酒場は様々な情報が得られる場所であり、噂話は仕事をこなすためにも大切な情報だ。

「もう何回目かも分かんねえけど竜に乗った白い鎧のヤツが次々と魔導器をぶっ壊してるって話だ」

「魔導器を壊して何をどうするんだよ。結界魔導器がないとおちおち暮らせねえし、生活もままならなっちまうぞ」

（ジュデイスさん魔導器壊してるんだね…もうすぐしたらその魔導器が全部なくなるんだけどな）

適当に相槌を打ちながら魔導器が無くなった時のことを考えた。ギルドは色々なことに引つ張りこまれるんじゃないのかな…となればもしかして儲かるチャンス？いやいや、その前に帰らないと。

「そっぴやカプワノールが新しく来た帝国のお役人さんのせいで荒れてるって話もあるぜ」

「ノール港っぴや、おいケイ。お前確か運搬の仕事を頼まれてその方角に行くよな」

「へっ？」

思考に耽っていた途中で呼ばれたものだから思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。酒場にいた人達が一斉に私の方を見たからびっくりしながらも依頼された仕事の内容を思い出した。

「荷物の中身は一切教えてくれなかったけど無事に届けられたら報酬の倍はお約束しますって言われたよ」

ローブの袖口から取り出した黒い小さな箱をちらつけさせながら新しい悪戯を見つけた子供のようにニヤツと笑う。

「おいおい…無事に届けられたらって色んな意味で危なくねえか？」

「面白そうじゃない！それにもう断れないし。依頼された時にこの箱と一緒に前金くれたからきちんと仕事はやらせていただきますよ」

はあと溜息をついて飽きたり、苦笑いを浮かべる皆の反応が楽しくてニヤニヤしていたら酒場のマスターが黒い箱をジッと見つめていた。

「そんなちっさい物をね…。お前さんに頼むぐらいのものだから余程大事なんだろう。気になるなその中身が」

マスターがそう言うと皆が小さい箱を吟味したり凝視する。

「少しぐらい見ても良いんじゃないの？」

「それはダメ。契約違反になる！」

「えー」

（まあだいたい見当はついてるけどね）

このままいてもブーブー文句を言われるし、届ける日時までは指定されなかったが早めに行ったほうが良いだろう。それにユーリやフレン達が先に到着するかもしれないしね。それじゃあねと一言告げ酒場を後にした。

さて、行きますか。

これからストーリーがどう動くのか思いを馳せながら赤く染まる空を背景にダングレストの街を出発した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3875w/>

ロンリーギルド

2011年10月15日16時52分発行